
俺と彼の異なる正義

ルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼の異なる正義

【Nコード】

N9657X

【作者名】

ルカ

【あらすじ】

ポケットモンスター、略してポケモン。

彼らのいる世界が、共に過ごせる世界が好きな少年は何を想い、旅立つのか。

ジムリーダー、トレーナー、コーディネーター、ブリーダー。その可能性は木の根のように、無限に伸びている。

少年は、何をを目指すのか。そして、旅の果てに、何を得るのか。

prologue

この世界には、不思議な生き物がたくさんいる。

犬とか、猫とか……そんなのじゃなくて。

人はその生き物たちと過ごし、育て、一緒に友愛を育み、共に戦いに身を投じる事もある。

この世界は便利だ。

空飛ぶ車がなくても、一瞬で遠くまで移動できるドアがなくても、その生き物たちがいれば、不可能なんて少ない。

絵に描いたような夢物語じゃない。人にとっては、つまらない戯曲に映るかもしれない。

でも、俺は好きだ。

共に笑い、泣き、怒り、憂い。

その名を呼べば、期待に応えてくれるのだから。

「ストライクっ、きりさく！」

ポケットモンスター。略してポケモン。

彼らのいるこの世界。俺は、この世界が大好きだ。

7 敗目。

ジョウト地方の外れ、険しい山々に囲まれた小さなジムがあった。

そこは、到達すること自体があまりにも難しい為に、設立して5年ほどが経過したと言うのに、2人のチャレンジャーしか受け入れていなかった。

「ストライクっ、でんこうせっか！」

そのジムの近く。湖の近くの草原で威風堂々と仁王立ちする、大きな体躯のリングマ。

リングマの目線の先には、一人の少年と、かまきりポケモンのストライクが、身構えていた。

少年の指示のもと、ストライクが目にも止まらぬ速さでリングマに

詰め寄る。

リングマの目の前に、あっという間に詰め寄ると、リングマが腕で振り払おうとする。

しかし、ストライクの方が速い。すぐに後ろに回り込んで、鋭い力マの一撃を浴びせる。

「続けて、おいうち！」

少しよけたリングマ。それを確認した少年が、おいうちで追撃を図る。

指示に従い、リングマの背後からおいうちを叩き込むストライク。そのスピードは、目を見張るものがあった。

「グアアアアア！」

おいうちでの追撃をまともに受けたリングマは、ストライクの方へと振り返り、雄叫びを挙げた。

「ヤバイ…ストライクっ、距離を――」

キレた。少年がそれを確認して、距離を取らせようとした時。リングマの顔に、ストライクはたじろいだ。

『こわいかお』。すばやさを下げられたストライクは、次の行動に移るのが遅かった。

けたたましい咆哮をあげて、リングマは腕を振り回す。
おいうちで、距離が詰まっていただけに、回避は不可能だった。

リングマの『あばれる』攻撃に、吹っ飛ばされたストライクは、地に伏して目を回していた。

「くそっ……戻れ、ストライク！」

少年は、慌ててストライクをボールに戻す。ターゲットを見失ったリングマが、ゆっくりと少年の方へ振り返る。

ヤバイ、逃げないとやられる。

直感でそう判断した少年は、全速力で草原を駆け抜ける。

リングマがそれを追い、腕を振り回しながら少年へと詰め寄ってくる。

木々を薙ぎ倒し、岩を破壊し、まるで土砂崩れのような破壊力を携えたリングマは、あと一歩という所で、少年を取り逃がしてしまった。

「はっ…あのヤロー、まだ勝てねーか。にしても、毎度毎度疲れはててこんらんして…楽しいのかね。」

皮肉混じりに、少年は岩場の陰からリングマの様子を伺う。
リングマは、こんならした事でターゲットを見失い、そのまま自らのナワバリへ帰っていった。

その光景を確認した少年は、大きく息を吐いた。そして、手の中のモンスターボールに視線を落とす。

「まーた、負けちまったなあ…」

モンスターボールの中のストライクは、申し訳なさそうに少年を見上げていた。

少年とリングマの戦闘は、これが初めてのものではなかった。
ストライクと出会った日。その時からずっと、戦ってきた。

その戦績は0勝7敗。この山々のポケモンが強いこともあるが、あのリングマはこの界隈のボス。

あれでも、最初に比べればずいぶんと戦えるようになったくらいだった。

「はっはっは、リチアくん。また負けたのか？」

「惨敗！ あいつ強すぎるよ、ユーゴさん。」

少年の名はリチア。トレーナーズスクールを卒業し、ポケモンを手にしてから8日目の12歳の男の子だった。

「でも、キミのお父さんみたいになりたいのなら、もっと頑張らなきゃね。」

リチアに微笑みかける青年は、ユーゴ。リチアの父の弟子、という立場らしい。

彼もポケモントレーナーで、リチアに比べれば圧倒的な実力と、経験の差があるのは言うまでもない。

「さあ、ジムに帰ろうか。今日は久々にチャレンジャーが来るらしいよ。」

「そうなの？ 聞いてないなあ…まあ、いいや。バトルも見たいしね。」

2人は、小さなジムへと向かう。山の麓に建てられた、無骨なジム。

シロガネ山の、シロガネジム。
それが、このジムにつけられた名称だった。

カントーからの挑戦者

「ただいまー。」

ユーゴと共に、ジムに戻ってきたリチア。ジムのドアを開くと、父親と20手前くらいの青年が視界に映った。

父親は、このシロガネジムのジムリーダー。青年は、恐らく例のチャレンジャーなのだろう。

隣に従えたガルーラから醸し出された雰囲気。それは、あのリングマとは比べ物にならない程の、強者のもの。

ピリピリと、張り付くような緊張感。これが気圧されるという感覚だろうか。

「ん、戻ったか。ちょうど今からジム戦を始めるところだ。ユーゴ、

審判を頼むぞ。」

「ハイツ、わかりました！」

父、スオウと青年がこちらへ気づいた。青年はリチアの顔を確認すると、優しい笑みを浮かべた。

絶対的な強者の風格に似合わない、優男風のチャレンジャー。彼がどのようなバトルをするのか。興味深く感じた。

「ではこれより、ジムリーダースオウと、チャレンジャーナツキのジム戦を行う。使用ポケモンは2体。どちらかのポケモンが全て先頭不能となった時点で――」

バトルフィールドに場を移し、向かい合う父とチャレンジャー。チャレンジャーは、マサラタウン出身のナツキというらしい。

ゴツゴツした、シロガネの山中のようなフィールドで、どのようなバトルを展開するのか。

2人のバトルは、静かにその幕を開いた。

「よし…まずは、エビワラー！」

スオウの1匹目は、パンチポケモンのエビワラー。かくとうタイプで、様々なパンチを得意とするポケモンだ。

ナツキはエビワラーを見て、一つ間を置いた。先ほどまで携えていたガルーラでは相性が悪い。なにをくり出すのか。

「リザードン！」

チャレンジャー、ナツキが選択したのはリザードン。ほのお・ひこうタイプで、かくとうタイプのエビワラーには相性が良い。

が、エビワラーのパンチはかくとうだけではない。かみなりパンチがある為、ひこうといえども油断は命取りだ。

スオウは先攻をナツキに譲る。

ナツキは、エビワラーの様子を軽く見て、リザードンをけしかけた。

「リザードン、かわらわりっ！」

大きな翼を最大限に動かして、リザードンは一気にエビワラーに向かって直進。

そのスピードたるや、リチアのストライクのそれよりも圧倒的に速かった。

リザードンは拳を振り上げ、エビワラーへと振り抜く。が、当たらない。

エビワラーの『みきり』。

リザードンの攻撃は不発に終わっていた。

「エビワラー、かみなりパンチ！」

「くっ…そらをとぶ！」

不発に終わったリザードンに対して、エビワラーが右の拳に電気を纏わせる。

ナツキも危険と判断し、リザードンを上空へと逃がす。しかし、スオウはそれを許さない。

「スカイアッパー！」

『そらをとぶ』で逃げたりザードン。それを狙いすましたように、スオウはスカイアッパーに攻撃を切り替えた。

その判断の速さは、圧巻の一言。トレーナー経験の浅いリチアにも、この戦法が一朝一夕で培ったものではないとわかる。

リザードンはエビワラーの拳をまともに受けて、空中でバランスを崩す。

たまらず、地上に降りた時。

エビワラーが、また次の一手へと動きを始めていた。

「エビワラー、きあいパンチっ！」

「っ……！ フレアドライブ！」

トドメの一撃を目論むエビワラー。リザードンも指示を受けて、体勢を立て直して炎を体に纏う。

互いに突っ込み、フレアドライブときあいパンチの正面衝突。
轟音を巻き上げ、2匹はそれぞれ反対方向へ吹っ飛ぶ。

まさに力と力のぶつかり合い。ジム内を包む熱気をまざまざと感じたりチアは、まばたき一つ惜しいと、目を見開いた。

倒れた2匹は立ち上がらない。

互いに目を回して、引き分けという結果に終わっていた。

2人はそれぞれポケモンをボールに戻す。息つく暇さえなかった激しいバトルも、ここでようやく一拍置かれた。

「なかなかやるじゃないか…カントーでも有数のトレーナーとの噂は伊達じゃないな。」

「スオウさんこそ…最強のジムリーダーの名は錆びいていませんね。」

互いに笑みを浮かべた2人。

スオウは、先に次のボールに手をかけた。

次にスオウが選んだのは、ゲンガー。ゴーストタイプのポケモンだ。

ジムというものは、大体が何かのタイプのエキスパートであるが、このジムは数少ないタイプにこだわらないジム。

スオウが特化しているタイプはない。だが、どんなタイプにも対応出来るような実力を見たい。という強い思いが、このジムの設立に繋がったらしい。

「……………ガルーラ！」

ナツキはゲンガーを確認して、少し考え込んでから、ガルーラを選択した。

ガルーラはノーマルタイプ。ゴーストタイプには相性が悪く感じるが、ノーマルにゴーストの技は効かない。

相性としては、どちらかが有利・不利というわけではなさそうだ。

「ガルーラ、メガトンパンチ！」

ナツキの指示を受けたガルーラが、ゲンガーまでの距離を詰めて力一杯拳を振るう。

ゴーストタイプには、ノーマル技は効かない。あれだけのリザードンを育てていたナツキ。こんな選択ミスをするとは思えない。

「っ……！ ゲンガー、かわすんだ！」

突然、スオウが何かに気づいたらしく、ゲンガーに指示を送る。ゲンガーも戸惑いながら、かわそうとするが、間に合わない。

鈍い音が響き、ゲンガーが衝撃に押される。ガルーラの攻撃はクリ

ーンヒットしていた。

「やはり、きもったまか…」

「ガルーラ、続けてメガトンパンチ！」

『きもったま』。リチアもトレーナーズスクールで習ったことのある特性の一つ。

ノーマルやかくとう技が、ゴーストタイプにも当たるという特性。気付くのが遅かった為、ゲンガーはまともに攻撃を受けていた。

ナツキは攻撃の手を緩めない。

ガルーラに指示を送り、ゲンガーを追い詰めていく。

「ゲンガー、きあいだまつ！」

スオウもやらねばなしで、黙っていられない。ゲンガーはすぐに立ち上がり、両手にエネルギーを溜めて放出する。

本来は、かなりの大技で、命中させるのは難しい技だが、ガルーラは突っ込んできていたので避けられない。

ゲンガーのきあいだまを、正面から受けたガルーラ。タフなガルーラの為、まだ先頭不能には至っていないが、大きなダメージには違いない。

衝撃に後ずさりして、ガルーラはしっかりとその足で踏ん張る。が、ほとんど体力は残っていないのか、かなり苦しそうだ。

「ゲンガー、休ませるな！ 10まんボルト！」

続けざまにスオウは、ゲンガーに追撃を指示する。10まんボルトは、きあいだまに比べればずっと初速も速い。

「こらえる！」

避けるのは無理。そう判断したナツキは、ガルーラに防御を指示。
ガルーラはしっかりと体勢を整える。

激しい稲光の中、電撃がガルーラに直撃する。これを耐えられるかどうかで、このバトルも変わるだろう。

電撃が止み、ガルーラはまだ倒れなかった。ナツキの言葉と期待を背負い、根性だけで耐え忍んでみせた。

「ガルーラ、きしかいせい！」

「しまっ…！」

追い詰めた事により、少し隙を見せたスオウ。そこを逃さずに、ナツキは文字通り、起死回生の一撃を仕掛ける。

鬼気迫る攻撃に、ゲンガーも回避する事が出来ない。ガルーラの一撃を喰らって、吹っ飛んだゲンガーは、そのまま岩に激突。

完全にダウンしてしまった。

「ゲンガー、戦闘不能！ よって、勝者チャレンジャー、ナツキ！」

掲げられたフラッグ。それはナツキに向けて挙げられていた。父は負けてしまったが、その一進一退の攻防は、新米の目にはとても新鮮に映っていた。

ガルーラに駆け寄り、優しく包容するナツキ。先ほどまでの険しい表情はどこへ行ったのか。

穏やかな笑みを浮かべて、戦い終わったガルーラを優しく労った。

「うん、実に良い戦いだった。これを渡しておこう。」

「ありがとうございます。」

バトルが終わった後、スオウはナツキにバッジを渡した。白銀に輝く、『プラチナムバッジ』だった。

「……………」

「どーだった？」

「よく…わからない。」

これがジム戦。想像の遙か上に行くレベルの戦いに、リチアは夢でも見たかのよう。

ユーゴが感想を聞いてきたのに、リチアは曖昧な返事しか返すことが出来なかった。

帰路、決意

「ロケット団がシルフカンパニーを占領した時、ちょうどジム戦やろうと思ひまして、ヤマブキに寄ってたんですけど——」

その夜、シロガネジムではスオウ、ユーゴ、リチアにナツキを交えての夕食が行われていた。

バトルの後、せっかくだからという事で、一泊してもらう事になったからだ。

食事時の会話は、専らナツキの旅の話。ナツキはジョウト、カントーを回って、バッジも今日手に入れたものを含めて17個。

その間の3年間の旅について、ユーゴが問いかけたのがきつかけだった。

旅の経験のないリチアにとって、ナツキの話はどんな冒険ものの小説やドラマより面白かった。

中でも、ロケット団との戦いに3人は夢中になって聞き入った。当時、ニュースにもなったその事件は、スクールでも習った。

近年、世界各国で起こった大きなテロは3つ。それらはすべて、民間人によって解決されたと聞いた。

カントー、ジョウトでのロケット団。ホウエンでの、マグマ団・アクア団。シンオウでのギンガ団。

ナツキが話しているのは、この中のロケット団の事。教科書や、先生の口から知った事件を解決した人間が目の前にいる。

この光景を、スクールで授業を受けている頃のリチアに想像するこ
とが出来ただろうか。答えはNOである。

「リチアも、旅に出るのか？」

「え…あ、俺は……」

ナツキに問いかけられ、リチアは口ごもる。旅に出たい。そう思うのは確かだが、不安も大きい。

ナツキが体験した事だって、一歩間違えれば命を落としかねない事であるのは間違いない。

「不安か？」

答えを出せないリチアに、スオウが問いかける。小さく頷くと、父は優しい瞳を向けた。

「誰だって…最初は不安なんだ。旅に出ろ。と言っている訳じゃない。じっくり、考えるんだ。」

「……………わかった。」

そう言うと、スオウはリチアに寝るように促した。時計を確認すると、確かに子供が起きているような時間ではなかった。

おやすみ。と、3人に告げたりチアは、一人自室へと戻った。

布団に潜り込み、目を瞑ると、今日の2人のバトルが頭に浮かんだ。

自分がリングマと戦う時のような、駆け引きも何もない戦いとは違う。戦略と、パワーに満ちた世界。

旅に出れば、それも養われるのだろうか。闇に落ちる意識の中、リチアの中で、答えはすでに出ていた。

「ストライクっ、きあいだめ！」

翌日、リチアは早朝から日課となりつつあるトレーニングを行っていた。

きょうしよに当たりやすくなったところで、リチアは小石を離れた所へ投げる。

「でんこうせっか!」

続けて、リチアが指示を出すと、ストライクは飛んでいく小石を追いかけて加速する。

素早く移動したストライクは、カマで小石を叩きつける。直径3cmくらいの小石は、静かに亀裂が入り、真っ二つに割れた。

「おお、的確で速い。ついこの間産まれたばかりだって聞いたのに、よく鍛えられているね。」

リチアが声のした方を振り返ると、ナツキがストライクを見て拍手を送っていた。

隣にはキングドラ。昨日は姿を見せなかったポケモンを連れていた。

「おはようございます。」

「うん、おはよう。」

爽やかな笑顔を浮かべ、ナツキはリチアの近くの段差に腰を降ろした。

キングドラは湖へ。雄々しくも、優雅に水辺を渡るその姿に、リチアも目を奪われた。

「で、答えは出たかい？」

「はい。俺…旅に出たい……いや、出ます。出て、色々なものを見てみたいです。」

その言葉を受けたナツキは、そうか。とだけ呟くと、キングドラを手元に呼び寄せた。

「旅に出れば、色々な事がある。時には辛い事もある。そんな時は、一緒に旅する仲間を頼れば良い。君が愛情を込めて接すれば、きっと彼らも答えてくれる。」

キングドラを優しく撫でるナツキ。貫禄たっぷりのキングドラも、気持ち良さそうに顔を緩めてナツキに甘えていた。

その日の昼前。ナツキはリザードンと共にマサラタウンへと帰っていった。

彼が残したものは、チャレンジャーの少ないジムへの活気と、少年の心に残った一言。

少年の心に、それははつきりと焼き付き、離れない。憧れというものは、こういう事なのか。

少年は、幼いながらにそれを感じた。そして、強く心に決めた。自身も旅に出て、彼のようなトレーナーになることを。

「それじゃ、10日間だったけど……ありがとう。また来るよ。」

「元気でね、旅の無事を祈るよ！」

「母さんによろしくな。」

ナツキとの出会いから数日。

リチャは、父とユーゴと共にクチバシティの港へ来ていた。

リチアの実家はイッシュ地方のカノコタウンで、父は単身赴任ではないが、1月ごとにジムと自宅を交互に過ごす。

その為、リチアは今日の昼に船で帰ることに。帰宅後は、母を説得して旅に出る。

まだ見ぬ町、人、ポケモン。

これから待ち受ける様々な出会いを夢見て、心を弾ませて船に乗り込んだ。

ほどなくして、汽笛をあげて船は港を出た。甲板から見える父と、ユーゴの影が、徐々に小さくなっていく。

ベルトにつけたモンスターボールに手をかけた。中を覗き込むと、ストライクも意気込んでいるのがわかる。

「よし、頑張ろう！」

少年が主人公の冒険の物語は、その瞬間に開幕した。太陽は、それを見守るように、暖かく世界を照らしていた。

旅立ち、贈り物

「え？ 別にいいわよ。気を付けて行つてらっしゃいな。」

母のこの一言で、少年の旅は始まった。

「軽っ！」

「いいのよ、男の子なんだから、活発にいかなくっちゃ……はい、ランニングシューズ。」

父から話でも聞いていたのだろうか。即決で了承した母は、息子の旅の準備を進めていた。

新しいランニングシューズを箱から出し、ライブキャスターの設定を確認。まるで、自身が旅に出るかのようだ。

「…………俺、荷物まとめてくるね。」

「ハイ。」

大きくため息をついて、リチアは2階の自室へと向かった。

階段を上がって突き当たりの左の部屋。ドアノブを回し、中に入る。

部屋はベッドと机、パソコンに据え置きของเกม機。それから、スクールで使った教科書。

それ以外は特に何もない。目立ったものはなく、年頃にしては、少し片付きすぎているくらいだろうか。

リュックを手に取り、キャンプキットを放り込む。何枚か服や下着を入れて、リュックの半分くらい。

「……………あれ？」

あと、なにか必要なものはないかと辺りを見渡すと、ベッドの上に一つ。モンスターボールが転がっていた。

母のポケモンだろうか。リチアは何となく好奇心にかられて、ボールを手を取った。

中を覗き込むが、見たことないポケモン。母が新たに捕まえたのだろうか。

リチアは、そのボールの開閉スイッチを押した。赤い光が走り、ラッコのようなポケモンが現れた。

「なんだ……………なんてポケモン？」

丸々とした顔には、ヒゲ。お腹には貝。なんとファンキーなポケモンだろうか。

見た目で判断するなら、水タイプ。あまり強そうには見えないが、愛くるしい姿をしている。

「あ、リチアー。アララギ博士が贈り物ってボール置いていったわよー。」

見計らったようなタイミングで、下から聞こえてきた母の声。もう開けたよと、リチアは苦笑するしかなかった。

「じゃあ、博士にお礼言ってくる。」

ポケモンをボールに戻し、ベルトに装着する。ストライクに続いての2匹目のポケモン。

腰に新たに乗った重み。これほど嬉しい重みもなかった。

家を出て、大きく深呼吸を一つ。昼下がりの町並みは、田舎町と言えど活気はある。

ご近所さんに挨拶をしながら、新しいランニングシューズの感触を確かめながら、アララギ博士の研究所へと向かう。

走って約5分。研究所の前で郵便物を見に来ていた助手のお兄さんに挨拶をして、リチアは研究所の中へと入っていった。

田舎町に似合わない、大きな建造物。中に入ると、様々な機材と資料が所狭しと並んでいた。

「こんにちはー。アララギ博士います?」

「やあ、リチアくん。博士なら奥にいるよ。」

資料の整理をしていた助手に挨拶。言われたように、奥へと入っていく。

この研究所は一般解放されており、リチアも子供の頃から幼馴染みと共に、良く訪れたものだ。

その為、中の構造はよく知っている。アララギ博士のいる、研究室のドアをノックして、返事が聞こえてから中に入った。

「こんにちは。」

「あらら、リチアくん。帰ってきたのね。」

中に入ると、すぐに博士は気づいたようで、座っていた椅子から立ち上がって笑顔を向けた。

アララギ博士は、ポケモンの研究者としては珍しい女性。それも、若くしてその地位まで上り詰めた実績も兼ね備えている。

リチアは、博士からの贈り物であるモンスターボールから、ラッコのポケモンを出した。

「ああ、残ってたのはミジュマルだったのね。」

「ミジュマル？ 残ってた？」

アララギの言葉に、リチアが疑問を問いかけると、ラッコのポケモンの名前だと説明した。

また、ボールは本来ならリチアの幼馴染みも含めた3つ用意されていた。それぞれの、スクール卒業記念にだ。

ほのおタイプのポカブ。くさタイプのツタージャ。そして、このみずタイプのミジュマル。

幼馴染み3人で選ばせるつもりだったらしいが、リチアが2人よりも早く、父からストライクのタマゴを手にしたことで、選択権を剥奪されたらしい。

「それに、2人とも…もう旅立つちゃったわね。」

「……………はい？」

「トレーナーとしてのアドバンテージは、リチアにあるから僕らは先に行きます。だって。」

アララギから話を聞くだけで、何となくその光景が頭に浮かんできた。確かに、幼馴染みの片方は言いそうだ。

「俺もすぐ出て、2人に追い付きます。」

「あ、待って……旅に出る時に、お願いがあるの。」

帰ろうとするリチアを呼び止め、アララギは懷から、赤い機械を取り出す。

リチアはそれを受け取り、言われるがままにスイッチを押した。すると、機械は動きだして画面を映す。

『ミジュマル お腹のホタチで戦う。攻撃を受け止めてから、さかさず切りつけて反撃するのだ。』

画面に映し出されたのはミジュマルのデータ。そして、特徴が音声で再生されていた。

「これ……！」

「それはポケモン図鑑。2人にも渡したんだけど……ようは、出会ったポケモンをそれに記録してほしいの。」

話を聞いてみると、このポケモン図鑑は、ポケモンの近くで起動さ

せると自動で、そのポケモンのデータが記録される。

現在、確認されている抱けでも、ポケモンの種類は600を超える。また新たな発見と、色違いや模様違い等も記録する事で、研究に協力してほしい。との事だった。

リチアは話を聞くと、少しだけ図鑑をいじってみた。すると、別の画面が映し出された。

使える技という表記の下に、『たいあたり』『しつぽをふる』という、2つの技が表示されている。

ただデータを記録するだけでなく、そのポケモンの事を詳しく教えてくれる。これは、トレーナーにとってかなり有益なもの。

「わかりました、研究に協力します。」

「ホントに？　じゃあお願いするわね。」

幼馴染みの2人も持っているようだし、何より便利で、断る理由がない。

リチアは図鑑を上着の内ポケットにしまって、アララギ博士の研究所を後にした。

まさか父の所に行っている間に、選択権を剥奪され、2人に先に旅立たれるなんて思いもなかった。

リチアはすぐに家に戻ると、出る前に用意の終わっていたリュックを背負う。

結構な量の荷物の為か、苦になるほどではないが、リュックはなかなか重い。

「じゃあ、行ってらっしゃい。お土産よろしくねー。」

「旅行に行くんじゃないんだから……まあ、いいや。行つてきます。」

母に手を振り、自宅を後にする。これから始まるのは旅。1歩ずつ、その感触を踏みしめながら、1番道路へ向かつていく。

速く2人に追い付く。ナツキのように強くなる。広い世界を見てみたい。

純粋な想いを乗せて、1番道路に入った。スクールのバトルの実習で来た以来。だが、その頃とは違う景色に見える。

「お、ヨーテリーだ……よし、ミジュマルっ！」

野生のポケモンに出会い、自らのポケモンをボールから出す。教育では味わえなかった感覚が、リチアの頭に渦巻いていた。

追い付け追い抜け

「ストライク、みねうちっ！」

それはまるで、草原に走る一筋の閃光。ストライクの新技『みねうち』が、ミネズミを捉えた。

みねうちは、倒せるほどのダメージを与える際に、そのギリギリで止める技。

相手を倒せない特殊な技だが、この技には有効な使い道がある。

リチアは予めリュックから取り出していた、モンスターボールをミネズミへと投げた。

綺麗な放物線を描いたボールは、ミネズミに当たり、その中へと招き入れる。

赤い光に包まれたミネズミは、ボールの中に吸い込まれる。
地に落ちたボール。カタカタと小さく揺れ、やがて落ち着いた。

ボールの開閉スイッチから発されていた、赤い光が消える。それが
捕獲成功の合図だ。

リチアはボールを手にとり、ベルトに固定する。リチアが捕獲した
ポケモンは、これで2匹目。

その内訳はヨーテリーと、今捕まえたミネズミ。この辺りでよく見
かけるポケモンだ。

この2匹は本格的に育てるかは別として、図鑑の為に捕獲したもの
だ。

通常、ポケモントレーナーが連れていくポケモンは6体。数を集め

て喜ぶ趣向家とは違う。

育てるにも、戦うにもバランスの良い、6という数を取り決められたわけではないが、トレーナー間のマナーとして考えられている。

その為、6体はバランス良く様々なポケモンで構成しなければならぬ。この段階で、戦力を決めるのは早すぎる。

「ミジユマルも、ストライクも、戦闘に慣れてきたし……カラクサタウンへ急ぐか。」

リチアは図鑑をしまい、ストライクを出したまま靴紐を結び直す。

カラクサタウンまで後僅か。

このまま、一気に走り抜けるつもりだった。

ストライクに目で合図を送り、地を蹴る。帽子は、落ちないようにリュックに入れた為、髪が風に揺られるのを感じた。

左手に見える川を通りすぎ、そのまま草むらをつつきる。程なくして見えたのは、カラクサタウン。

「あれ、チエレン…と、ベル？」

街と道路の境界に見えるのは、幼い頃から見知った、メガネの少年と、帽子をかぶった少女。

少年は腰かけていた岩から立ち上がり、少女はこちらに気づいて大きく手を振った。

「リチアー、早くー！」

間違いない、幼馴染みだ。
リチアは二人の顔を見て、またスピードを上げた。

二人に追い付く為に、全力で草むらを駆け抜けた。

「はあっ…なんで、ここで止まってるんだよ？」

二人の前で止まったりリチア。一気に走って来た為に、一度大きく深呼吸して、息を整える。

「ベルが、次の街への第一歩は3人同時が良いって言ったから、こうして待ってたんだよ。」

「だってその方がいいよ、これからは3人別々なんだし。」

リチアからの質問に答えたメガネの少年はチェレン。そして、もう一人の少女がベル。

二人は、リチアと同じようにスクールに通い、卒業した仲間。俗に言う、親友というもの。

「まあ、それは良いとして……リチアも来たし、カラクサタウンに入ろう。話はそれからだ。」

「そーだね。ほら、リチアも早く!」

「わかったから、急かさないでくれよ。」

ベルに手を引かれ、リチアは二人の横へ並ぶ。目の前に映る景色は見慣れたものではあるが、それぞれにとって意味の違う見え方だった。

チェレンの掛け声と共に、三人は街の中まで息を合わせて駆け抜けた。

旅立ってから初めての街。カラクサタウンにたどり着いた瞬間だった。

た。

「えへへ、なんだか新鮮だねえ。」

「うん、ちょっと違うかも。」

ベルは天真爛漫な笑顔で、リチアの顔を覗きこむ。リチアも笑顔で返して、チエレンの様子も確認する。

「ストライク……イッシュにはいない、珍しいポケモン。タイプは……むしとひこう。覚えてる技は——」

「チエレンー！ もつと感動とかないの！？」

すでに図鑑を開き、ストライクの観察へと移っていたチエレンに、ベルが声を張り上げる。

顔を真っ赤にして、力一杯怒る姿はなんともいえない愛くるしさが

あった。

「良いじゃないか、別に。カラクサタウンは初めてじゃないんだから。」

しゅしゅ、チエレンは図鑑を閉じてバッグの中へ入れる。ベルも、それを見てとりあえずは満足したらしい。

「それより、ベル。リチアとバトルするんじゃないの？」

「あ、そーだった。リチア、バトルしようよ！」

チエレンに言われて思い出したベルは、リチアの前に詰め寄った。

せっかくポケモンをもらって、旅に出るのだから、一度勝負をしてみたいらしい。

リチャも了承して、三人で近くの広場へと向かう。ちょうど、その辺りに人影はない。この分なら、思いきりバトルすることが出来そうだ。

使用ポケモンは2体。それは、ベルの手持ちに合わせたの数字。審判は、チェレンが行うことになった。

「じゃあ、行くよ。ヨーテリー！」

「ストライクっ！」

リチャが選択したポケモンはストライク。現状では、一番頼りになるポケモン。

ミジュマルでも良かったのだが、まずは様子見ということでの選択だった。

それに対して、ベルのポケモンはヨーテリー。恐らく、1番道路で捕まえたポケモンだろう。

野生のヨーテリーよりも育てられているだろうし、指示する人間もいる。草むらで出会ったそれとは、違うと捉えた方が良さそうだ。

「ヨーテリー、かみつくつ！」

互いに出方を伺っていた二人。

先にポケモンをけしかけたのは、ベルだった。

ヨーテリーは、指示を受けてストライクへと突っ込む。

ヨーテリーの攻撃力は高め。仮にレベル差があったとしても、この一撃をもらうのは得策ではない。

リチアはストライクに距離をとらせようとする。しかし、ベルはそれを許さない。

「たいあたりっ！」

「くっ… ストライク、かわしておいうち！」

攻撃の手を緩めないヨーテリー。ストライクは、辛うじて攻撃をかわすと、指示通りに攻撃を放つ。

ヨーテリーは、たいあたりの勢いで攻撃を避けきれずに、おいうちをまともに喰らう。

まだ体力は余っているようだが、成り行きでおいうちの効果も発揮されたらしく、体勢を整えるのが遅れた。

「よしっ、でんこうせっか！」

これを好機と見たリチャは、ここで一気に勝負をかける。ストライクもそれに応えて、一気に加速した。

ようやく体勢を立て直したヨーテリーを、ストライクが狙い撃つ。さすがにヨーテリーも、これは避けられず、クリーンヒット。

「あぁっ！」

ベルが声をあげる。ヨーテリーは直撃を受けた事で体力が尽きたように、倒れたまま目を回していた。

慌てて、ボールにヨーテリーを戻したベルは、ヨーテリーに労いの言葉をかけて、ボールを交換する。

2匹目は、恐らくはアララギ博士から譲り受けたポケモン。リチアは、ストライクと共に身構える。

「ポカブっ！」

ベルがボールを投げ、出てきたのはオレンジと黒色の小ブタのようなポケモンだった。

「ベルはポカブを選んだのか…」

「うん。さあ、いくよポカブ、ひのこっ！」

「まずっ……避けろっ！」

ポカブから放たれたひのこが、ストライクに迫る。これは効果抜群。さすがに直撃はまずい。

リチアは回避を指示するも、攻撃範囲の広いひのこを、ストライクは避けきれない。

直撃こそ避けられたものの、かなりのダメージを負わされた事がストライクの様子からも見てとれる。

「ひのこっ！」

ベルはまたもひのこ。有利なタイプの技を用いて、ごり押しで決めるつもりようだ。

リチアはもう一度回避を指示するが、それでもすべてを避けきるの
は不可能だった。

2回のひのこを浴び、ストライクはもう瀕死寸前。もう一度くらえ
ば、間違いなくやられる。

「……………きあいだめっ！」

そう判断したリチアは、次の一撃にかける事にした。さすがに2連
発の後、少し間をおかなければならぬらしく、きあいだめには
十分な時間だった。

「でんこうせっか！」

「あぁっ、ひのこっ！ 速く、速くっ！」

さすがにベルも、きゅうしょに当たるとまずいと思ったのか、ポカブを急かす。

ポカブもそれに応えて、ひのこの準備にとりかかる。ひのこは、技の初速が速い。

ストライクのでんこうせっかと、どちらが速いか。勝負はそれに委ねられた。

正面に迫るストライク。横に移動しても、ひのこを避けきる事は出来ないと判断して、最短距離で突っ切る。

まさに目前に迫った時、ポカブからひのこが放たれる。ストライクが振りかざしたカマが先か、それともポカブの技が速いか。

緊張の一瞬だった。

「どうだ……？」

交錯する2体。ストライクには、間違いなくひのこは直撃していた。

問題は、ポカブへのダメージ。少しでもダメージを与えられただろうか。

刹那、ストライクが倒れる。
戦闘不能。よくやった方だろうか。

「ポカブは……大丈夫そうだな。」

「えらいよ、ポカブっ！」

ベルに褒められて、嬉しそうに鼻を鳴らしたポカブ。リチアはそれを見て、ストライクをボールに戻す。

最後の技は不発に終わったが、ストライクはよく戦った。ベルと同じように声をかけて、ボールをベルトに固定した。

「ミジユマル、頑張ってくれ！」

代わりに、戦闘に出したのはミジユマル。ポカブに対して相性も有利にたてるし、みずでつぽうも覚えている。

ストライクを倒して、勢いにのるポカブの鼻っ柱を折ってやるだけの力はあるはずだ。

「アララギ博士からのポケモン同士で決着……なんか、ドラマ性あるよね。」

「それは確かに……でも、手加減しないから。」

「うんっ！」

笑顔を見せるベル。その姿は本当に楽しそうで、ポケモンバトルを純粹に捉えている。

ポカブも、それを感じとって一層気合いが入ったようで、鼻から大きく息を吹き出していた。

リチアは、しっかりとポカブを見据える。リングマに比べれば。今の指示は、リチアが先だった。

「ミジュマル、みずあそびっ！」

プラスマ団

「みずあそび……？」

小首を傾げるベル。ミジュマルが撒き散らした水の意味をよくわかっていないようだ。

本来、ミジュマルはみずタイプなのでひのこによるダメージは少ない。

しかし、育て始めのこの時期に1日早く出たとなれば、レベルに差もあるだろう。

攻撃範囲の広いひのこの対策。
少しずつ削られれば、体力の差が如実に現れる。

それを防ぐ為の策がこの『みずあそび』。一見すると、あまり意味

のないように見える技だが、これはほのおタイプの技の威力を下げる効果がある。

これでひのこではほとんどダメージを見込めない。もっとも、たいあたりを選択する可能性の方が高いのは確かだが、念には念を。という選択だった。

「ポカブっ、ひのこ！」

接近戦に持ち込む前に、まずは様子見ということだろうか。ベルが選択したのはひのこ。

みずあそびにより、半減されたひのこ。さらに、直撃を避けられた事でたいしたダメージはなかった。

「あれっ、なんで…？」

「ミジュマル、みずでっぽうだ！」

思った以上にダメージのないミジュマルを見て、一瞬隙を見せたベル。リチアはそれを見逃さない。

素早くミジュマルに指示を送る。ほのおタイプのポケモンに、みずタイプの技は効果は抜群。

ベルもそれをわかっていたから、回避をさせようとするが、指示が遅れた事で、ポカブはみずでっぼつをモロに浴びてしまった。

「ポカブっ、まだ大丈夫？」

みずでっぼつを受けたポカブは、ベルからの声を受けて立ち上がる。

やはりレベルに差があるようで、一撃で。というわけにはいかなかった。

ポカブは立ち上がって、まだ十分元気そう。その様子から見ると、体力の半分も削れていないだろうか。

「たいあたり！」

先程のひのこが効果的でないと判断したのか、ベルはポカブへの指示を変えた。

ミジュマルが、眼前に迫るポカブのたいあたりをかわそうと試みるが、ポカブが速い。

ミジュマルも同じように直撃を喰らい、後ずさる。ダメージ量はポカブと変わらないくらいだろうか。

ミジュマルも、まだ若干の余裕がありそうだ。

「……ミジュマル、きあいだめ！」

ここでリチアは一気に勝負をかける。ミジユマルにきあいだめを指示し、次の一撃にかける事に。

「っ、ポカブ、ニトロチャージ！」

さすがにレベル差があっても、みずでっばつを急所にもらうと負けてしまう。

そう思つての切り札の投入だったが、それは判断ミスだった。

「受け止める、ミジユマル！」

『ニトロチャージ』は、ほのおタイプの技。みずあそびの効果でその威力は半減。

真っ正面からの直撃を受けたミジユマルだったが、倒れない。

がっしりとポカブを捕まえていた。

この至近距離なら避けきれない。逃げようとするポカブを、ミジユマルは離さなかった。

「みずでっぽうー！」

0 距離発射されたみずでっぽうを、ポカブは思いきり浴びた。

その威力に押され、2 転、3 転。どうやら急所にも当たったようで倒れたまま目を回していた。

「リチアの勝ちだね。ベルはみずあそび知らなかったんだ……授業でやったのに。」

「えへへ……その時は寝てたのかな？ ポカブ、お疲れさま。」

照れ笑いを浮かべながら、ベルは戦い終わったポカブを抱き抱え、ボールへと戻した。

「やっぱりリチアは強いねー。スクールでも1番だったもんね！」

「でも、危なかったよ。最後までミジュマルが頑張ってくれたから。」

リチアはそう言うと、ミジュマルの頭を撫でてボールへと戻す。本当にギリギリの戦いだった。

きあいだめと、みずあそびの効果があれば敗北を喫していただろう。ミジュマルが、最後にポカブを捕まえたのが大きかった。

「ほら、二人ともポケモンセンターに行ってきたよ。僕はここで持つてるから。」

近くのベンチに座ったチェレン。ベルとリチアは、ポケモンを回復させる為にポケモンセンターへと向かう。

ポケモンセンターは、24時間開いていて、宿泊や食事、ポケモンの治療まで行ってくれる。

ベルトリチアは、ポケモンを預ける。互いに大きなダメージはなかったようで、すぐに回復が終わった。

「あ、リチア。私ちょっとお買い物していくから、先に行つてて。」

「買いすぎちゃダメだよ。」

「もー、わかつてるってば!」

自身のボールを受け取り、ベルトに固定したりチアは、一人でポケモンセンターを出る。

出て、先程のベンチの所へ戻ろうとしたが、どうも辺りが騒がしい。

「なにかあるのか…?」

ベルの買い物は長そうだし、ちょっとくらいなら大丈夫。そう考えたりチアは、人だかりの方へと近づいていく。

人だかりの奥には、フードつきの衣装に身を包んだ大人と、貫禄のある初老の男性。

「あ、リチアも来たんだ。」

「チエレン…なにか始まるの?」

「いや、わからない。僕も来たところだから。」

後ろからやってきたチエレンと話していると、初老の男性が一步前に出た。

右手には拡声器。これから何かの演説でも始めるのだろうか。

拡声器の感度を確かめる為に、テスト中。テスト中と、男性は声を入れる。問題なく使えるとわかった男性は、続けて口を開いた。

「ワタクシの名前はゲーチス。プラズマ団のゲーチスです。」

拡声器を通した声が辺りに響く。プラズマ団という、聞きなれない名前に、周りもざわついた。

「今日、ワタクシが皆さんにお話しするのは……………ポケモン解放についてです。」

ポケモンの解放。ゲーチスがそう言った瞬間に、ざわつきはさらに増した。

が、無理もない。なんの前触れもなくこんな事を言われて、混乱しない人間なんていない。

ゲーチスはそれを察しているのか、全員に諭すように言葉を続けた。

「われわれ人間は、ポケモンと共に暮らしてきました。お互いを求め合い、必要としあうパートナー。そう思っておられる方が多いでしょう。」

最後の言葉がどこかひっかかる。リチアは、ゲーチスの口元が若干緩んだのをはつきりと確認した。

なにかを企んでいるような、そんな笑み。ナツキの優しい笑顔とは真逆のそれに、吐き気さえ覚えた。

「しかし、本当にそうなのでしょうか？ われわれ人間が、そう思っているだけ……そんな風に考えた事はありませんか？」

「どういう……意味だ？」

チェレンが、なにかを察したように言葉に出した。リチアが感じたものを、チェレンも感じとったようだ。

「トレーナーは、ポケモンに好き勝手命令している……仕事のパートナーとしてもこきつかっている……そんなことはない、誰が言い切れるのでしょうか！」

強く言い放ったゲーチス。ここで辺りのざわつきは最高潮に達していた。

そんなことはない。とは、確かに言いきれない。本当に不遇な扱いを受けているポケモンもいるかもしれない。

誰にも、そう思うところがあるから、ゲーチスの言葉は綺麗に耳に入ってくる。

それを確認したゲーチスは、一気に言葉を並べる。人間の耳に通やすい、綺麗な言葉を。

ポケモンたちに、われわれがすべき事はなんなのか。そう言った後、話は初頭の議題へと戻った。

「そう、ポケモンの解放です！」

そうしてこそ、人間とポケモンは初めて平等になる。なんて、聞こえの良い言葉だろうか。

聞こえが良すぎて、リチアには逆に疑いの念が沸き上がっていた。

本心は、そう思っているのか。

リチアは、先ほど見たゲーチスの気味の悪い笑みが、頭から離れなかった。

N

「ポケモンの解放か……確かに、それが一番なのかもな。」

「そんなことホントに出来るのか？ 生活だって、俺たちはポケモンに依存してるのに。」

ブラズマ団のゲーチス。

彼が話した演説は、広場に大きな喧騒を残していた。

現在、人の生活というものはポケモン次第で大きく変わると言っている。
良い。

建設や、鉱山等での発掘作業。

サーカス等での見世物。その用途は様々だが、急に切って離せないものであることは確かだ。

しかし、それが本当にポケモンにとって苦痛でないのか。そう聞か

れば否定できない。だからこそ、人の心に迷いが生じていた。

ゲーチス、プラズマ団の意図がどうであれ、そう考えるという事は、もともとどこかで疑問に感じていたのかもしれない。

「キミのポケモン、今話してたよね……」

人がそれぞれ、思い思いの意見を交わし合う中で、一人の少年がリチアとチェレンに歩みよった。

薄い緑色の髪をした少年は、リチアのベルト。ボールを固定している所を指差していた。

「ずいぶんと早口なんだな……それと、ポケモンが話した……だって？ おかしな事を言うね。」

「ああ、話しているよ。そうか……君たちにも聞こえないのか……可哀想に。」

少年は大きなため息を溢した。
まるで、見込み違いだとしても言いたげに。

リチアは、無意識に腰に手を回していた。ストライクの入ったボールを握り、すぐに出せるよう身構える。

それを見た少年は、軽く笑みを浮かべ、言葉が続けた。

「ボクの名前はN。」

「……………リチア。」

名乗りを挙げた少年、N。警戒を緩めないリチアは、静かに自身の名を告げる。

「ボクはチェレン。頼まれてポケモン図鑑を完成させるための旅に

出たところ。もつとも、ボクの最終目標はチャンピオンだけど。」

「ポケモン図鑑ね……そのために幾多のポケモンを、ボールに閉じ込めるんだ。」

チエレンの言葉を聞いて、Nが今度は蔑むような冷たい目を彼に向けた。

チエレンもそれに気づいたのか、リチアと同じように懐へ手を忍ばせる。

「ボクもトレーナーだが、いつも疑問で仕方がない。ポケモンはそれで幸せなのかって。」

この口頭は、先ほども聞いた耳に通りやすい綺麗な言葉。

ゲーチスほどの嫌悪感を感じないものの、Nもプラズマ団の一員。リチアはそれを確信した。

リチアは固定されたボールを、ベルトから外す。ほぼ同時に、Nも左手にボールを掴んでいた。

「そうだね、リチアだったか。キミのポケモンの声をもっと聞かせてもらおう！」

声とともに、リチアはボールを開いた。赤い光とともに現れたストライク。ポケモンセンターで回復してすぐの分、かなり気合いが入っているようだった。

Nも少し遅れて、ポケモンを繰り出す。紫色の毛並みを揺らす猫のポケモン。

図鑑が情報を提示してくれる。

このポケモンは、あくタイプのチョロネコというらしい。

あくタイプの弱点は、かくとうとむし。ストライクはまだれんぞく

ぎり使えないし、かくとう技もない。

相性は互角。向こうも、ほのおやいわタイプ等の技を持っているとは考えにくい。

リチアはまず、Nの出方を伺う。ストライクの横に並び、息を合わせた。

「チヨロネコ、すなかけ！」

Nの指示は、リチアとストライクに対する牽制。本来、ひこうタイプを要するストライクには使わない手。

Nが狙ったのはただの牽制。
間を取られる事を嫌っての事だったようだ。

リチアは、ストライクと左へ大きく移動する。チヨロネコは速い部類のポケモンだ。

しかし、リチアにはストライクの方が速く感じる。チヨロネコのレベルはそんなに高くなさそうだ。

「みだれひつかき！」

それを読んでいたのか、Nがリチアの前に回り込む。眼前に現れたチヨロネコの攻撃が、ストライクにクリーンヒット。

リチアは完全な読み負けで、初手を許してしまう。が、ストライクに思ったほどのダメージは見られない。

やはり、チヨロネコのレベルはさほど高くないようだ。

「こつそくいどう！」

指示を送ったリチアが、ストライクに取り残される。ストライクの

スピードが格段に上昇していた。

そのスピードを活かし、チヨロネコの攻撃を掻い潜ったストライクは、逆に目の前まで詰めよった。

「でんこうせっか！」

こうそくいどうで素早さを高め、さらにその上でのその技は、その名の通り、まさに電光石火の一撃。

先ほどの仕返しとばかりに、ストライクはチヨロネコへ高速の打撃を叩き込んだ。

「続けておいうち！」

チヨロネコに休む暇を与えない。リチアからの指示を受けたストライクは、チヨロネコを追撃。

レベルに多少の差があった事もあり、チヨロネコはそのまま目を回して戦闘不能。

先手こそ、Nの好きなようにやらせてしまったが、以後は終始リチアのペース。

こうそくいどうの効果が非常に大きかった。

「モンスターボールに閉じ込められている限り……ポケモンは完全な存在にはなれない。」

Nは、戦闘不能に陥ったチヨロネコをボールへと戻して、呟いた。

蔑むような目ではなく、どこか遠くを見るような。悲しげな瞳だった。

「ボクはポケモンという友達のため、世界を変えねばならない。」

ボールを懷に戻し、リチアの方へ向きなおすと、まっすぐに目を捉えて言い放つ。

やはり、その言葉と顔付きに嫌悪感は抱かない。心から、自由とはなにかを考えているのだろう。

黙って瞳を見つめ返すリチア。ほどなくして、Nは踵を返して落ち着きを取り戻した町へと進んでいった。

その背中には、どこか哀愁すら漂っていた。

「……おかしなヤツ。だけど気にしないでいいよ。トレーナーとポケモンは、互いに助け合っている!」

「そう……だよね……」

ストライクの瞳を見つめる。ストライクは、リチアのポケモンでいることに不満は感じていないだろうか。

Nの言っていた言葉を鵜呑みにする訳ではないが、ポケモンと話すことが出来れば。確認だけは取る事が出来る。

しかし、反面。怖い事でもあった。ストライクが自身の事を嫌っていたら――

リチアは、頭に浮かんだ雑念を、頭を振って無理矢理に消し去った。

余興と再会と

「えーっ、チエレン先に行っちゃったの？」

「うん。早くサンヨウシティに行きたいんだってさ。」

プラズマ団、Nとの一件を終えた後。チエレンはベルを待たずに、この町を発った。

リチアも、一応止めはしたのだが、どうしてもチエレンが言うので、無理強いはしなかった。

「そんなに先生に挨拶したかったのかなあ？」

「ああ…かもしれない。チエレンは先生にベッタリだったから。」

二人の話す『先生』とは、リチアたちが先日まで通っていたトレー

ナーススクールの先生。

サンヨウシティには、そのスクールがある。三人は立ち寄った際には挨拶をするつもりだった。

「うーん……じゃあ私たちも急いだ方がよいね。リチア、またスクールで会おうね！」

ベルはそう言うと、サンヨウシティへ向けて駆け出していった。リチアもそれを追うように、ゆっくりと歩を進めた。

あくまでも、マイペースに。
急ぐことはなく、2番道路に入る。

2番道路は、1番道路に比べて現れる野生のポケモンに変化はない。しかし、駆け出しのトレーナーがここでトレーニングを行っている事が多い。

今日もそれは例外ではなく、リチアは数人のトレーナーと戦いつつ、順調に前へと進んでいく。

途中でNが使用していた、チヨロネコを捕まえたり、ストライクが新しい技を覚えたりと、収穫は様々だった。

そして、2番道路を抜けると、そこはサンヨウシティ。数週間ぶりの景色に、リチアも感慨深いものがあつた。

「もう、二人はスクールに行ってるのかな？」

とりあえずリチアは、ポケモンセンターに寄って体力を回復し、その後、スクールへ向かった。

「やあ、リチア。久しぶりだね！」

「あ、デント……今日も授業？」

「うん。今、終わったところだよ。」

リチアがスクールの前まで来ると、そこには緑色の髪が特徴的な青年が一人。

彼はデント。この町では有名な三人組の一人で、優秀なポケモンレーナーである為、度々スクールの授業を受け持っている。

「リチアもポケモンをもらったんだね。じゃあジムにも挑戦するのかい？」

「……………あ、デントってジムリーダーだったっけ。」

その言葉に、苦笑いを浮かべるデント。彼はこの町のジムリーダーという立場だ。

スクールでの授業で会う事が多いせいか、そのイメージは完全に消え去っていたが、有名な三人組のジムリーダーの一人だった。

「ま、まあ……それはいいとして、チェレンとベルは挑戦するって言ってたよ。」

「そうなんだ……俺も挑戦したいな。」

「わかったよ。サンヨウジムは君の挑戦を待っている！」

デントはジムリーダーらしく、少しカッコつけて言い放った。
今度はリチアが苦笑いを浮かべながら、その場を後にした。

スクールのドアを開き、靴を来客者用のスリッパに履き替えると、正面、左側の通路から奥へと進む。

トレーナーズスクールの中はそんなに広くなく、玄関からまっすぐ進むと中庭。左が教室、右が倉庫になっている。

裏には実習で使う、ポケモンバトルが出来る広場があるが、他にはなにもない。一階建ての、小さなスクールだった。

「おお、リチアじゃないか！」

通路の奥の教室を覗きこむと、チェレンとベルが先生と話していた。

先生はすぐにリチアに気づき、声をあげた。リチアは教室の中に入り握手を交わす。

「リチアたちが旅立ったと聞いて、私も嬉しかったよ。トレーナーとして第一歩、おめでとう！」

「ありがとう、先生。」

先生は、まるで自身の事のように三人の旅立ちを喜んでいた。

「リチア、今からバトルしないか？」

「バトル？」

先生との再会を喜び、談笑をしていた三人だったが、チエレンが突然話を変えた。

「うん。実は生徒たちがまだ残ってるんだ。僕らが来ているからね。」

「で、せっかくだから……二人のバトルでも見せてあげたいんだよ。」

説明を進めるチエレンと先生。
リチアはベルはいいのかと、聞き返したが、カラクサでバトルしてないチエレンのみ。

その理由は、そんなに長く生徒を残すわけにもいかないという事。

断る理由もないので、リチアは承諾して四人で裏へと回る。

広場には生徒たちが集まっていた。見知った顔ばかりで、三人は手を振りながら、先生はゆっくりと広場の真ん中へと移動していった。

観客の中には、デントの姿もあった。話を聞いて戻ってきたらしい。

「それじゃあ、チェレンとリチアのポケモンバトルを始める。使用ポケモンは1体。どちらかのポケモンが戦闘不能になった時点で、決着とする！」

「二人とも、ガンバレー！」

先生の合図と、ベルの声。それを皮切りに観客からの声援も飛び交

う。

チエレンとリチアは、互いにボールに手をかける。スクール時代から競い合ってきた二人。

その二人の旅立ち後の一戦が、幕を開いた。

「いけ、ミジュマル！」

「ツタージャ！」

同時にボールを放り、ポケモンが姿を現す。選択したのは、互いにアララギ博士からのポケモンだった。

タイプではミジュマルが不利。

しかし、それだけで黙ってやられる訳にはいかない。

「ミジユマル、みずでっぽう!」

まずは牽制。リチアの指示を受けたミジユマルが、ツタージャに向けて技を放つ。

ツタージャは、すぐに回避行動をとる。素早さの高いツタージャ。もちろん、簡単に当たるとは思っていない。

「続けてみずでっぽう!」

下手な鉄砲数撃ちや当たる。ではないが、チェレンのツタージャはまだレベルもそんなに高くないはず。

覚えている攻撃技は、『たいあたり』や『つるのムチ』、『まきつく』。覚えていても『グラスミキサー』や『やどりぎのタネ』くらいだろう。

このみずでっぽうの目的は、距離を保つ為。接近戦に入れば、つる

のムチが待っている。

ある程度の距離を保っていれば、つるのムチが来るまでも時間が
必要になる。そうすれば避ける事も可能。

とにかく距離を詰めさせないように、リチアはミジュマルへの指示を
変えない。

「っ……つるのムチ！」

思うように距離を詰められない展開に、痺れを切らしたチェレン。

半ば強引にツタージャへ指示を送り、ツタージャはミジュマルへと
つるを伸ばす。

「よし！ ミジュマル突っ込め！」

リチアはこの瞬間を待っていた。ミジュマルも指示を受けて、つるのムチを掻い潜って距離を詰める。

チエレンが一瞬、しまった。という顔を浮かべたが、もう間に合わない。

ミジュマルは次の技の体勢に移っていた。お腹の貝を手に持ち、水を刃のように貝に保たせる。

「シエルブレード！」

ミジュマルが貝を振り抜く。

ツタージャは回避しようと試みるも、技をモロに受けてしまう。

ツタージャの体が宙に投げ出され、また二匹の間に距離が置かれる。

まだ戦闘不能には至っていないようで、ツタージャはゆっくりと立

ち上がり始める。

「ミジユマル、きあいだめ！」

この時間を利用して、リチアはミジユマルへ指示を送る。

ツタージャの体力は、3分の2程削れたら良い方だろうか。次の一撃で決めるには、急所に当てる必要がある。

もしかしたら、それでもまだ倒せないかもしれないが、勝利が近づくのは確かだ。

「ツタージャ、せいちょう！」

「っ…みずでっぽう！」

時間はかかったが、しっかりと立ち上がったツタージャに、チエレ

ンは指示を送る。

せいちょうは能力を上げる技。

邪魔する為に、リチアはすぐに指示を送る。

しかし、それも遅かった。

せいちょうを終えたツタージャは、つるのムチでみずでっぽつを弾いた。

「ツタージャ、これで決めるんだ！ グラスミキサー！」

「やばっ……ミジュマル、回避を——」

『グラスミキサー』。本来の威力はあまり高くはないが、くさタイプの技。それも、せいちょうで威力は上がっている。

これをもらうのは、さすがにマズイ。リチアは回避を指示するが、間に合わない。

螺旋状に舞い上がる草に、ミジユマルは巻き込まれた。

一つの賭け

「ミジュマル！」

グラスミキサーに飲み込まれたミジュマル。その技の威力に、周囲の生徒も驚いている。

せいちょうで力を増したそれは、ミジュマルを瀕死に限りなく近い状態にするには十分すぎた。

大きなダメージを負ったミジュマルが、フラフラしながらも立ち上がる。

「いけるか？」

リチアの言葉に応えるように、ミジュマルの顔つきが変わった。

あと一撃でさえ、くさタイプの技を受ければ戦闘不能になるのは目に見えている。

残されたチャンスは一度。今のミジュマルの中で一番強力な技、シエルブレードを叩き込む。

それで倒せなければ負け、間合いを詰める前に攻撃されれば負け。リスクは大きいが、それを狙う以外に残された道は考えられなかった。

それはミジュマルもわかっているようで、チェレンの出方を伺うリチアの指示を待ち、身構えている。

「……………ツタージャ、つるのムチっ！」

この間を嫌い、チェレンがトドメをかけようとツタージャへと指示を送る。

幸いにも離れていた為に、チェレンが選択した技はつるのムチ。せいちょうの副作用で、その初速は若干速くなっているが掻い潜れない事はない。

「ミジユマル、突っ込め！」

これを好機と見たリチア。ミジユマルも指示を受けて、全力で駆け出した。

眼前に迫り来るつるを紙一重でかわし、一步でも前へと地を蹴った。

「グラスミキサー！」

若干距離が縮まった事で、チェレンは攻撃を変える。大技・グラスミキサーの指示を送った。

ツタージャはそれに従い、グラスミキサーを放つ体制を整える。

「突っ込めえええ！」

リチアは迷わなかった。その力強い意志と声が、ミジユマルの背を押した。

ミジユマルはさらにツタージャとの距離を詰め、グラスミキサーを封じようといあたり。

これで体制を崩したツタージャは、グラスミキサーを放つことが出来ない。

「シエル、ブレード！」

これで決める。とでも言わんばかりにリチアは力を込める。その声に応え、ミジユマルの振りかざした貝から水の刃が鋭く吹き出していた。

それは、ミジユマルの意志に比例して大きく、大きく――

――大きく。

「まさか……『げきりゅう』か!？」

猛々しく姿を変えた刃。その光景を見たチエレンが、特性の発動に気づいた。

しかし、ツタージャは体制を崩している。回避を指示しようにも、シエルブレードはツタージャの眼前に迫っていた。

「ツタージャ戦闘不能！ よって、勝者……リチア！」

審判を勤めていた先生が、地に伏せたツタージャを見て勝負が決した事を宣言した。

ピンチになると、みずタイプの技の威力が上がる特性『げきりゆう』。それによって、力を増したシエルブレード。

それは、たいあたりで若干ダメージの残っていたツタージャを戦闘不能に至らせるには十分すぎる威力だった。

リチアは満身創痍ながらも、勝利をその手に掴んでみせたミジユマルを激励する。

戦いを終えたミジユマルは、リチアに頭を撫でられると、気持ち良さそうに目を瞑った。

「…………負けか。よく頑張ったね、ツタージャ。」

同じように、戦闘を終えたツタージャを手厚く介抱し、チェレンはボールへと戻した。

「いやあ、素晴らしい！ この前旅立っただばかりのトレーナー同士の勝負とは思えんな！」

チェレンとリチアの二人が、それぞれポケモンをボールに戻した後、まだ興奮冷めやらぬ様子の先生が二人に告げた。

リチアはふと、観客の様子を探った。どうやら、興奮冷めやらぬのは先生だけではなかったようだ。

二人の一進一退の攻防は、未来のトレーナー候補である生徒たちには良い刺激になったらしい。

「次は勝つよ、またやろう。」

「俺も負けない。互いに強くなろう。」

チエレンから差し出された手。

リチアはそれをしっかりと握り返した。

その場はそれで解散。生徒たちはそれぞれ家に帰り、日も傾いてきたのでリチアたち三人もポケモンセンターへ戻った。

リチアは貸し出された部屋に入ると、そのままベッドに飛び込んだ。

ここまで一気にやってきて、チエレンとのポケモンバトル。さすがに疲れがあるのはつきりとわかる。

今日はポケモンの回復が終わったら、食事と入浴を手早く済ませ、すぐに寝るつもりだった。

明日は初のジム戦があるからだ。本来なら、トップバッターはチェレンのはずだった。

しかし、チェレンは今日の勝負の後、自身もポケモンも少し鍛えてから挑戦すると言っていた。

ベルはベルで、まだ買い物を買わせてないとかで、リチアが初めに挑戦する事になった。

ジム戦の予定時刻は、明日の午前10時。早起きしてその日のコンディションも確かめなければならない。

とにかく今は、ポケモンたちの回復を待つばかり。リチアは部屋に置かれたタウンガイドを見ながら、時間を潰した。

明日がジム戦デビューだと考えると、どうにも落ち着かなかった。

あの3兄弟の内、誰と対戦する事になるだろうか。デントはくさタイプ、ポッドはほのおタイプ、コーンはみずタイプ。

それぞれが別のタイプのポケモンを所有し、ルーキーたちに相性の3すくみをよく理解してもらおうという試みで、挑戦者の最初のポケモンに対して有利なポケモンで挑んでくる。

リチャにとって、それはストライクになるのか。それともミジユマルなのか。

最初のポケモンという概念で考えれば、ストライクではあるものの、チェレンとのバトルでミジユマルを見られている。

となれば、相手はデントである可能性が高い。

「……………ストライク出してやろっかな。」

いや、やっぱりやめておこう。そう決めた直後だった。ジョーイさんから渡された番号札。

それに内蔵されたアラームが、部屋の中に鳴り響いた。それは、預けたポケモンたちの回復が終わった合図。

いつもながら、その仕事の早さに敬意を感じつつ、リチアは受け取りに向かった。

なんとなく、先程に比べれば落ち着きを取り戻していた。そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9657x/>

俺と彼の異なる正義

2011年12月25日20時56分発行